

スティグマとソーシャルポリシー

—福祉サービス供給及び受給レベルにおける

スティグマの政策課題とスティグマの捉え方の再検討—

Stigma and Social Policy

—A Review of the Political Issues and Understanding of the Stigma

in the view of the Welfare Service Supplying and Receiving level—

松岡 是伸

日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程

本研究の構成

本研究は4部構成全12章で構成されている。序章は本研究の目的や意義、先行研究の整理と到達点、本研究の視点と方法などで構成されている。

第1部は5つの章で構成されている(第1章～第5章)。ここではソーシャルポリシーにおいてスティグマとその研究が、どのように捉えられてきたのかをティトマス(Titmuss, M.R.)やT.H.マーシャル(Marshall T.H.)、ピンカー(Pinker, R.)、スピッカー(Spicker, P.)から検討することで明らかにした。そのことによってゴッフマン(Goffman, E.)らに見られた従来のスティグマ論からソーシャルポリシーのスティグマ研究への発展を紐解き、スティグマの対面的相互作用論から社会関係・社会生活論への変遷を明確にした。そしてソーシャルポリシーのスティグマ研究の範囲と視点、重要な知見や役割を明確にした。

第2部は、2つ章で構成されている(第6章～第7章)。ここでは福祉サービス供給レベルのスティグマを検討することによって、ソーシャルポリシー研究におけるスティグマの地位(位置・役割)を明らかにし、どのようにスティグマが付与されているかを明確にした。第2部の特徴は、福祉サービス供給体制とその枠組みからスティグマを検討し整理した点である。これによって福祉サービス供給システムにおけるスティグマを明確にした。そして福祉サービス供給システムの取り組みでは、スティグマを払拭することができない限界を整理することができた。これらの福祉サービス供給レベルの検討を通じて、スティグマは福祉サービスを利用する人々に直接的に見られることを明確にした。

第3部は、4つの章で構成されている(第8章～第11章)。ここでは福祉サービス受給レベルの観点から検討することによって、福祉サービスを利用する人々がどのようなスティグマを抱えていたのかなどを明らかにした。第3部の特徴は概ね2つである。ひとつは、スティグマを負う人々の経験や声などを可能な限り汲み取って検討したことである。もうひとつは、スティグマを捉えるための枠組みとして「スティグマの類似的集合」を導入したことである。その枠組みに従って福祉サービスを利用者の経験的事象を整理していった。そのうえで福祉サービスを利用する人々の主体性を含めて検討をおこないスティグマを明確にした。これらを通じて福祉サービスを利用する人々は、その人々の個人的で主観的な

側面にスティグマが見られることが明らかとなった。

第4部は、1つの章で構成されている(第12章)。ここでは福祉サービスの供給と受給レベルのスティグマを総合的に整理・検討した。そのうえでスティグマの政策課題を明確にした。本研究の結論として、ソーシャルポリシー研究におけるスティグマの位置とスティグマの付与自体を明確にすることができた。

以下では各部の要旨を示していくことにしよう。

序章 研究の目的・意義と4つの疑問

戦後から現在までにソーシャルポリシーはスティグマを払拭し、人々は権利として福祉サービスを利用できるはずであった。現在スティグマは、福祉サービス利用の手数料(負担、経費)と見做されたり、福祉サービス利用や財政を抑制になるという見解もある。さらには福祉サービス利用者に対して福祉依存者として社会的な非難や攻撃の対象とする場合すらあるのが現状である。このような現実問題からソーシャルポリシーは、福祉サービスの利用や財政を抑制することに対して暗黙的な理解を示す傾向にある。このとき、ソーシャルポリシーは、福祉サービス利用者に対してスティグマを課すことに対する理論的・科学的・規範的な根拠を引き出すことができるのであろうか。スティグマという経験的事実から理論的洞察や規範的検討はおこなわれているのであろうか。

そのため本研究の意図は、ソーシャルポリシーにおいてスティグマが、なぜ払拭されないのかを明らかにするための土壌を形成することである。それはスティグマという経験的事象を社会的な文脈や価値、規範を含めて結びつける作業をおこなうことである。そして「なぜ、ソーシャルポリシーはスティグマを払拭することができなかったのか」の一端を明確にしていくことである。

そこで本研究の目的は、先述した本研究の意図を踏まえ戦後から現在までのソーシャルポリシーにおけるスティグマとその研究の歴史の変遷を丹念に紐解き、スティグマの捉え方や位置づけ、スティグマの付与を明確にすることである。そこで具体的な目的は、第1に、ソーシャルポリシーがスティグマをどのように捉え位置づけてきたのかをソーシャルポリシー研究者のスティグマ研究から紐解き、整理し、ソーシャルポリシーにおけるスティグマの捉え方などを明確にすることである。第2に、戦後の福祉サービスの供給レベルをスティグマの観点から紐解くことにより、スティグマが福祉サービス供給においてどのように付与され、見られるのかを明らかにすることである。第3に、ソーシャルポリシーがややもすると見落としてきた福祉サービスの利用者(受給レベル)をスティグマの観点から紐解いていくことである。

研究の視点は、①対面的相互作用論と社会関係・社会生活論、②福祉サービスの供給と受給の区別と関係性、③利用(受給)者の視点(福祉サービスを与えられる人々への注目)である。本研究は、これら3つの視点から実施された。本研究の方法は、複雑に絡み合っているソーシャルポリシーの歴史の変遷のなかでスティグマに関する事象や事柄を紐解いていくことである。

これらのことからスティグマに関する先行研究の整理をおこなった。その結果、4つの疑問が浮上してきた。それは①なぜソーシャルポリシー研究は、従来のスティグマ論の「視野狭窄」に着目したのか(第1の疑問)。②ソーシャルポリシーにおけるスティグマ研究の

地位（役割・位置）はどうであったか（第2の疑問）。③福祉サービスを利用する人々はどのようなスティグマを抱えているのか（第3の疑問）。④ソーシャルポリシー研究はスティグマを見る視野をどのように広げたのか（第4の疑問）である。この4つの疑問を明らかにすることによって、本研究の目的を達成していく。

本研究の意義は、権利性の確立や普遍主義化などによってスティグマを払拭できるとしていたソーシャルポリシーがスティグマをなぜ払拭することができず、現在に至っているのかを検討するための土壌を形成することである。戦後半世紀以上が経ち、新たな福祉理念の登場や政策の対象認識の変化、相談援助関係の枠組みの変容が見られる。本研究によってこれらの変容をスティグマの観点から問い直す土壌を形成し、その後を政策的課題として展望することである。またこれらの土壌が形成されていない弊害は、福祉サービス利用者にあらわれてくる。そのため本研究はできる限り福祉サービス利用者の声を汲み取ってスティグマの経験的事象から理論的洞察、検討を実施している点も本研究の意義である。

第1部 ソーシャルポリシーにおけるスティグマ研究の系譜

第1部では、ソーシャルポリシーのスティグマ研究の位置を明らかにするために、スティグマ研究で顕著な功績を残す研究者を取り上げ整理・検討した。第1部では、ソーシャルポリシーにおけるスティグマの捉え方や特質を明確にすることである。これらの作業を通じてソーシャルポリシーにおけるスティグマの問題を明確にする。

その結果として第1の疑問に対する応答である。ソーシャルポリシーのスティグマ研究は従来のスティグマ論を否定したわけではない。ソーシャルポリシーのスティグマ研究は、従来のスティグマ論よりも幅広い社会的文脈からスティグマを捉えたのである。要するにスティグマを対面的相互作用論で捉えるのではなく、社会関係・社会生活論で捉えたのである。そのためソーシャルポリシーのスティグマ研究は、従来のスティグマ論から袂を分かち独自の発展を遂げることとなった。その成果として次の2つの点が重要とされた。ひとつは、スティグマを捉える場合、利用者の立場から捉えていくことである。もうひとつは、スティグマを把握する場合、人々の幅広い社会的文脈（社会関係・社会生活論）を踏まえることであった。これらのことからソーシャルポリシーのスティグマ研究は、スティグマを捉える範囲を拡大させ、いくつかの研究的発見を遂げたのである。それを整理すると第1にスティグマと依存性、第2に家族と重要な他者の存在、第3は、反福祉的状况におけるスティグマの問題、第4に、構造的な社会関係様式に見られるスティグマを見出したのである。これらの発見はソーシャルポリシーのスティグマ研究の発展に貢献した。

第2部 スティグマと福祉サービスの供給

第2部では、福祉サービス供給レベルをスティグマの観点から検討することであった。これらの検討を通じて、福祉サービスを利用する人々のスティグマに言及し、ソーシャルポリシーのスティグマ研究の位置や役割（地位）を明らかにした。

これらの結果、福祉サービスを利用する人々のスティグマを主に2つの点を明らかにすることができた。第1に、福祉サービスを利用する人々の社会的ネットワークが乏しい場合、最も深刻なスティグマが付与される危険性が見られたことである。第2に、人々の生活を全面的に支える福祉サービスは、スティグマが生じやすいことや、福祉サービスの担

い手と接触する機会が多いところに、スティグマが見られることなどが明らかにした。

そのうえで福祉サービスの供給システムだけでは、スティグマを払拭することができないことが明らかとなった。それは福祉サービスを利用する以前に人々が、既にスティグマを負っている場合である。この場合、福祉サービス自体がスティグマの影響を受けることもある。次に、スティグマを負う人々は、福祉サービス利用によってスティグマの感受性が高まりスティグマが強化される傾向が見られた。これらは福祉サービス自体で対応できる問題ではないことを明確にした。

これらのことから第 2 の疑問に対する応答である。福祉サービスの供給と利用を厳密に区分し、双方の関係性を分析したところ、福祉サービスの利用を着目した研究自体が少なく、スティグマ問題は断片的理解に留まっていた。そしてソーシャルポリシーのスティグマとその研究の地位（役割）は、スティグマが問題や課題として指摘されているほどの地位を与えられていない。

戦後ソーシャルポリシーの実施は、スティグマを増長するような供給体制や枠組みではなかった。むしろ劣等処遇の廃止や権利性の確立などによってスティグマを抑制するような供給体制や枠組みを形成していた。それにも関わらずスティグマが見られるのは、福祉サービス利用者の立場からのスティグマ研究が少なく、スティグマに対する理解が断片的なものに留まっていたためである。

このような結果の影響は、福祉サービス自体のスティグマ化にもつながるが、直接的な影響（被害）は、福祉サービスを利用する人々に見られるのである。

第 3 部 スティグマと福祉サービスの利用（受給）

第 3 部では、これまでのソーシャルポリシー研究では、見落とされがちであった福祉サービスを与えられる人々のスティグマを明らかにした。そして福祉サービスの利用（受給）レベルにおいてスティグマがどのように見られるのかを検討した。なお、そのためにスティグマを捉える枠組みとして「スティグマの類似的集合」を導入した。これによってスティグマの類似性と多様性を把握でき、スティグマを負う人々の語りや沈黙などを可能な限り汲み取っていくことができる。

これらの結果、スティグマを負う人々の経験を身体的境遇、経済的境遇、心理的境遇、社会的境遇として類似的に集合させることができた。これらの各境遇のスティグマを見ていくと、文化性や依存性の影響が見られた。文化性とスティグマを見れば、スティグマの制度的文化性の形成によって人々のスティグマに対する感受性は高められていた。依存性では人々が依存状態になることに対してスティグマを課す傾向があった。特に人々の生活を全面的に支える福祉サービスは、依存状態に対するバッシングを受けやすいのである。以上のようなことを踏まえ、スティグマを負う人々は、自らの社会的影響力の無さや無力感を感じ主体性の喪失していた。

そのうえで、第 3 の疑問に対する応答である。福祉サービスを利用する人々が抱えるスティグマは見過ごされることが多く、福祉サービス自体がすべてのニーズを汲み取っていくことに限界がある。特に個人的な事情が絡むニーズの場合は、汲み取ることが非常に困難となる。これらのことからスティグマは、人々の個人的主観的な側面に見られたのである。そこでは福祉サービスを利用する人々の主体性や選択する行為、意志などが制約・拘

束されるようなスティグマが見られた。

第4部 スティグマの捉え方の再検討と福祉サービス供給及び利用におけるスティグマの政策課題

第4部では、第1部から第3部までの研究結果を受けて、これまでの福祉サービスの供給と利用（受給）レベルのスティグマを整理し、総合的に考察した。

では、最後の疑問（第4の疑問）に対する応答と結論を明確にしていきたい。

最後の疑問への応答として、ひとつは、ソーシャルポリシーのスティグマ研究は、スティグマの捉え方を従来の対面的相互作用論から社会関係・社会生活論へと変化させたことである。これによってスティグマの捉え方自体が変化した。この変化により幅広い社会関係や社会生活からスティグマを捉えていったのである。もうひとつは、ソーシャルポリシー研究は、スティグマを社会関係のなかで捉えた点である。対面的相互作用論は、スティグマを負う人々に対する他者や社会との相互作用のなかでスティグマを捉える。社会関係・社会生活は、スティグマを負う人々とその人々を取り巻く社会的文脈においてスティグマを捉えるのである。

では、本研究の結論である。ソーシャルポリシーのスティグマ研究は、スティグマ自体にあまり関心を向けておらず、スティグマとその研究の位置（地位・役割）はそれほど高いとは言えないことが明らかとなった。次に、スティグマの付与過程では、福祉サービスの供給と利用の感受性の高まりが幅広い社会的文脈においてスティグマを喚起していた。そのスティグマの喚起によって、利用者にスティグマが付与されていた。

これらのことから本研究の到達点は、主に3つである。第1に、従来のスティグマ論が用いていた対面的相互作用論からソーシャルポリシーのスティグマ研究が見出した社会関係・社会生活論へ捉え方の変遷を整理し、社会関係・社会生活論の重要性を明確にすることができた点である。第2に、福祉サービスにおけるスティグマの付与過程が整理されたことである。この点は、これまで断片的理解に留まっていた。よって本研究では、福祉サービスにおけるスティグマの付与過程を社会関係・社会生活論から明確にしたのである。第3に、福祉サービス利用者の観点を明確に取り上げたことである。これによって福祉サービス利用者の観点からそれ自体と福祉サービス供給との関係を見ることができ、その結果、スティグマの類似的集合を示すことができた。

このことから福祉サービスのスティグマの政策課題は、福祉ニーズや制度利用に対して利用する人々が気後れやためらい、恥辱、屈辱などが生じているということである。そして福祉サービスの利用によって、スティグマを課される人々は主体性を喪失し、乗り越えると思うことができないような苦境に追いやられる。さらにそれらは福祉サービス供給レベルのみの課題に留まらず、文化性や依存性の問題を含みながら構造化された社会関係の様式のなかで見られるのである。そのためスティグマの断片的な理解のもとでの改善策を講じることも自体が政策課題なのである。

以上のように本研究の結論や到達点を述べてきた。本研究を通じて最大の課題は今後、ソーシャルポリシーにおけるスティグマ研究をどのように発展させていくかである。その際、本研究で明確にした知見や検討課題などが重要な社会的・学問的な貢献を果たすことを考定している。